MAFF NAVI ふくしま
MAFF
東北農政局　福島県拠点
Vol.15《令和８年３月》

テーマは「新規就農者」

令和７年４月11日、令和６年に改正された食料・農業・農村基本法に基づく、初の「食料・農業・農村基本計画」が閣議決定され、サスティナブルな農業構造の構築のため、親元就農や雇用就農の促進により、49歳以下の担い手（認定農業者、認定新規就農者（法人を除く））を確保することとしています。

福島県の2025年農林業センサス（概数値）によると、49歳以下（男女）の基幹的農業従事者が増加した市町村は20市町村に上り、そのうち10人以上増加したのは３市町村でした（MAFF NAVI ふくしま Vol.13参照）。今回は、これら３市町村の中でも、地域おこし協力隊の募集が新規就農者の確保に結び付いている桑折町を取材しました。

全国の新規就農者は減少傾向

全国の令和５年（令和５年２月1日～６年１月31日）の新規就農者は、43,460人で前年に比べ5.2%減少し、就農形態別にみると、「新規自営農業就農者」は、30,330人、「新規雇用就農者」は9,300人、「新規参入者」は3,830人となっています（図１～３）。

49歳以下の「就農形態別新規就農者」の推移は、総数では減少傾向ですが「新規参入者」は令和２年から2,600人前後の一定数が確保されています（図４）。

就農形態について

○新規自営農業就農者　調査期日前１年間の生活の主な状態が、「学生」や「他に雇われて勤務が主」から「自営農業への従事が主」になった個人経営体の世帯員（家族）。（例：学生から親元へ就農。）

○新規参入者　調査期日前１年間に、新たに農業経営を開始した経営の責任者及び共同経営者。（例：Ｉターンや移住地で就農。）

○新規雇用就農者　調査期日前１年間に、新たに法人等に常雇い（年間７か月以上）として雇用され、農業に従事した者。（例：農業法人に就農。）

図１　年齢別　新規自営農業就農者数

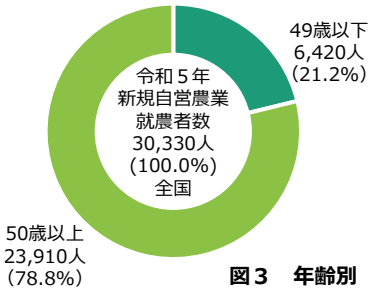


図２　年齢別　新規参入者数

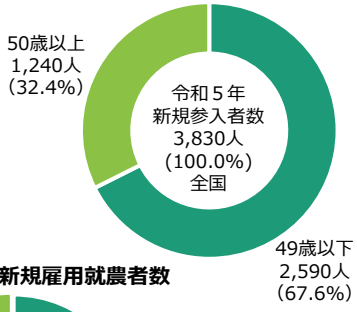
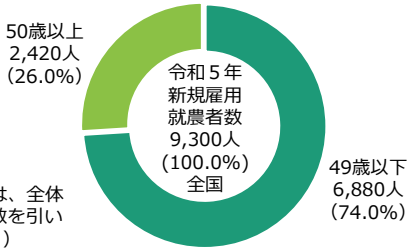
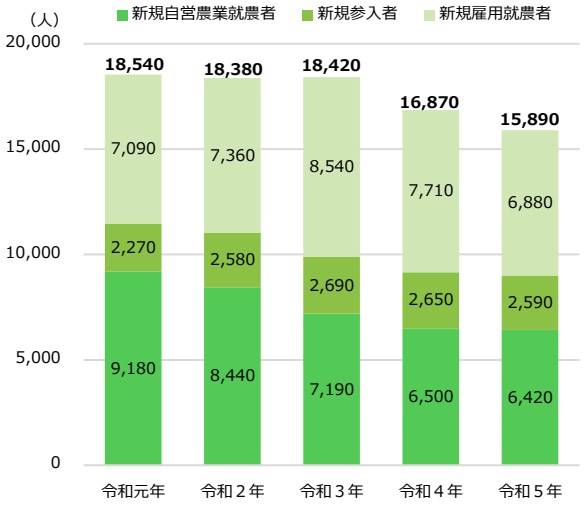


図３　年齢別　新規雇用就農者数



注：　50歳以上の人数は、全体から49歳以下の人数を引いたもの。（図１～３）

図４　49歳以下　就農形態別新規就農者の推移（全国）



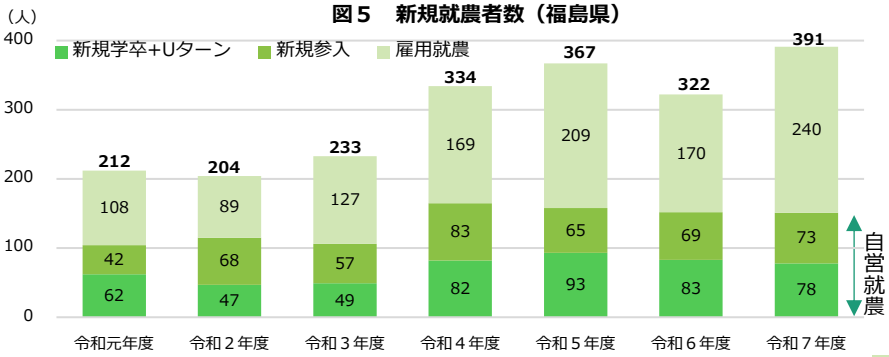
出典：農林水産省　新規就農者調査

福島県の新規就農者数は、令和４年を境に300人台に増加

福島県農業担い手課の調査によると、令和７年度調査（令和６年５月２日～令和７年５月１日まで）の新規就農者は391人（対前年比69人増）でした。令和４年度から４年連続で300人を超えました。

就農形態別では、自営就農が151人と前年度並み、雇用就農が240人と前年度から70人増加となりました（図５）。

図５　新規就農者数（福島県）



出典：福島県農業担い手課

桑折町　産業振興課　　丹治　愛莉さん
ー「献上桃の郷」の継承に向けて、一人一人に寄り添いながらー

桑折町は「献上桃の郷」として広く知られ、新たなももの担い手育成に向けて、地域おこし協力隊制度を活用しています。隊員の募集にあたっては、大都市圏または地方都市等からの移住の意思があり、全国に誇れる高品質なももの生産者を目指す方を対象としています。
今回、町役場で地域おこし協力隊業務を担当されている丹治さんにお話を伺いました。

丹治　愛莉さん

丹治さんはまず、「この取り組みで何よりも大切なことは、隊員の方々の熱い想いと、指導にあたってくださる受け入れ農家の皆さまの温かいご支援に支えられている点です。」と話され、その言葉にすべてが詰まっていると感じました。
桑折町における令和２～７年度の新規就農者は15名で、内訳は男性13名、女性２名です。全員が第三者継承による就農であり、そのうち「地域おこし協力隊」を経て就農した方は７名（男性６名、女性１名）となっています。令和８年度以降の地域おこし協力隊のエントリーや問い合わせも引き続き寄せられています。
丹治さんからは、「担い手不足が課題となる中、地域に定着し、「献上桃の郷」の産地維持に大きく貢献していただいていることにとても感謝しています。隊員OB・OGや現役隊員の皆さん一人一人の前向きな取り組みが、次の応募へとつながり、良い循環になっていることも大きな成果です。」とのお話がありました。
さらに、「自分と年齢が近い隊員の方々が懸命に取り組む姿から、私自身も活力をいただいています。ももの出荷後に役場へ立ち寄ってその日の成績を見せてくださったり、樹園地を訪問した際に袋掛けの方法を教えてくださったり、そうした何気ない日々の触れ合いが自分の励みにもつながっています。」と、温かい交流の様子も語ってくださいました。

「地域おこし協力隊」の応募者は関東圏出身者が多く、全体の約６割を占めています。年齢は30～40代が中心です。東京等で開催される就農フェアや地域おこし協力隊募集説明会、桑折町ホームページなどをきっかけに問い合わせがあり、その後の応募や農業体験へとつながっています。なお、桑折町では応募があった際に、先輩農家との懇談や樹園地での作業体験などを随時実施し、地域の方々と交流しながら現状を理解してもらうようにしています。
就農時の樹園地は、農業委員会と連携した果樹経営を引退された農家とのマッチングのほか、研修先の受け入れ農家や地域の先輩農家からの紹介を通じて確保されています。受け入れ農家は50～60代が多く、中にはＩターンで就農された方もおり、協力隊員にとって相談しやすい体制が整っています。
隊員が定着している背景には、「献上桃の郷」としてのPR活動や町独自の支援事業に加え、町民の温かさ、町担当者や農業委員会の丁寧な対応などが相乗効果を生んでいます。
また、地元農家が隊員へ農業機械や資材を譲渡するなど、定着を後押しする環境が整っていることも大きな要因です。

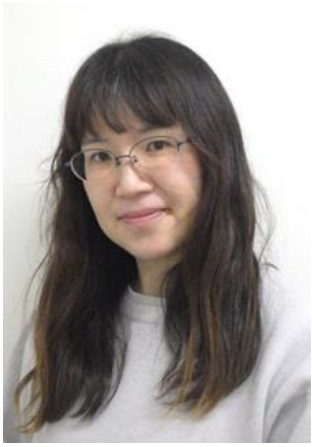
桑折町では、町独自の就農支援として、「桑折町就農者支援事業補助金」により、65歳以下の新規就農者へ３年間、年額50万円（計150万円）を交付しています。
また、三親等以内の親族の農業経営を継承する方には、「桑折町農業後継者奨励金」として50万円を交付しています。
最後に丹治さんは、「今後も新規就農者を目指す方々が安心して農業に取り組めるよう、引き続きお一人お一人に寄り添いながら支援してまいります。」と話されました。
その言葉から、あのすばらしいもも畑の風景と「献上桃の郷」への希望が力強く感じられました。

桑折町のもも畑

桑折町の献上桃

写真提供：桑折町

地域おこし協力隊員を訪ねて　　西野　優香さん
ー協力隊員からもも農家へのチャレンジー


西野　優香さん

関東出身の西野さんは、Ｉターンで桑折町地域おこし協力隊に応募し、令和５年９月から活動を開始しました。現在は３年目を迎えています。

応募のきっかけは、もともと「のどかな環境で暮らしたい。」という思いがあったこと、そして新型コロナウイルスの流行を機に移住を本格的に考えるようになったことだそうです。

これまでに民間企業の農業インターンシップに参加し、「農業をするなら果樹を。」という気持ちが強まった西野さんは、果樹生産が盛んな地域を訪ね歩きました。その中で「果樹王国ふくしま」のイメージから福島県を訪れ、地元ならではの農産物の美味しさや、地域の方々の温かい雰囲気に魅力を感じたといいます。

さらに、「献上桃の郷」桑折町の存在を知り、桃源郷のように広がる果樹園の景観に心を奪われて体験会に参加しました。体験会の受け入れ先の農家は関東からの移住者で、境遇が近いこともあって不安や疑問に丁寧に答えてくださり、西野さんが協力隊への応募を決意する大きなきっかけになりました。

着任後は、町役場から紹介された受け入れ農家のもとで、もも栽培の技術習得に励んでいます。１、２年目は農家と共に作業に取り組み、３年目となる現在は、約１haの園地を提供され、研修ほ場として自ら責任を持って作業を行っています。

「もも栽培は、夏の猛暑や冬の寒さ、風の強い日の作業など大変なことも多いですが、続けていく中で栽培への理解が深まり新しい発見もあります。収穫の喜びは格別です。」と笑顔で話してくれました。ももの収穫が落ち着く頃には、ライスセンターでの作業にも参加し、地元農家の方々とのつながりも生まれたそうです。「皆さんの農業に対する熱意が本当に素晴らしいです。」と、地域への思いも語ってくれました。

卒隊後は、現在の受け入れ農家の紹介により住居や園地の確保にも見通しが立っており、就農準備が着実に進んでいます。

福島県については、「震災の印象が強く、応援したい気持ちがありました。皆さんの頑張りで復興が進んでいると感じます。」と話します。

将来は、天候リスクも考え、ももだけでなく、りんごや水稲にも取り組みたいとのこと。また、食の安全に配慮した栽培や、６次化による商品づくりにも関心があるそうです。

「まずは、もも栽培の基盤をしっかり固めてから、少しずつ挑戦の幅を広げたい。」と意欲を語ってくれました。

今回の取材を通して、西野さんの着任前から卒隊後までを見据えた計画性と、前向きな行動力が非常に印象的でした。もも畑での作業風景からは希望が溢れており、今後の活躍がますます楽しみです。

せん定作業をする西野さん

桃源郷のように広がるもも畑

満開のももの花

写真提供：桑折町

地域おこし協力隊員の受け入れ農家を訪ねて　　八巻　聡さん
ーＩターンから就農、そして法人設立ー

八巻　聡さん

関東出身の八巻さんは、桑折町へＩターンで移り住み、現在は「株式会社やまきファーム」の代表としてももの栽培に取り組んでいます。

平成26年頃、桑折町でもも農家を営む親戚の農作業を手伝ったことがきっかけで、農業継承の話が持ち上がりました。幼いころから親しんできた果樹園で、自然と農業に魅力を感じていた八巻さんは、平成28年に福島県農業総合センター果樹研究所で１年間研修を受け、就農への第一歩を踏み出しました。

翌平成29年には、水稲17a・果樹園14aの規模で個人農家として独立。国や町の支援制度も活用し、地元で本格的な農業経営をスタートさせました。

しかし、干ばつや病害などの影響を受ける年もあり、順調にいかない年もあったといいます。

一方で、周辺農家の高齢化により園地を受け継ぐ機会も増え、令和６年12月には法人化し「株式会社やまきファーム」を設立。現在は、ももの果樹園４haを５名のスタッフで管理しています。

法人化には、先輩農家から会計事務所を紹介され、税制面でのメリットや従業員の社会保障制度を継続できる点が大きな後押しとなりました。

また八巻さんは、桑折町地域おこし協力隊の研修受け入れにも積極的に取り組んでいます。令和７年５月に卒隊した協力隊員は、その後、町内に定住し自ら果樹経営を始めました。卒隊後も八巻さんは、技術指導や相談などの伴走支援を続けています。「地域になじみやすいよう、何でも聞きやすい雰囲気づくりを心がけた。」と八巻さん。協力隊員の人生の節目に立ち会う責任の重さも感じながら、温かく寄り添ってきました。

今後については、「仕事とプライベートのバランスを大切にしながら、今の規模を維持していきたい。」と語ってくれました。親戚も果樹経営を続けているため、今後の高齢化の状況によっては、一緒に農業を行う可能性もあるといいます。

福島県での暮らしについて伺うと、「食べ物も水もおいしいし、温泉も近くて自然が豊か。子育て環境も整っていて、とても暮らしやすい。」と笑顔で答えてくれました。スーパーや高速道路など生活環境も充実しており、「自然の中で子育てしたい。」という願いが叶えられ、今の生活にとても満足しているそうです。

ももを見つめる八巻さんの眼差しには、静かなやさしさと、まっすぐな決意がにじんでいました。桑折町の自然と人との繋がりを大切にしながら、一歩一歩進んできたその姿は、とても印象的です。

これからも、町の未来を育む力として、八巻さんの挑戦は続いていきます。

収穫を待つもも

一面広がるもも畑

収穫したももを確認する八巻さん

写真提供：桑折町

ーおわりにー

今回、「新規就農者」をテーマとして取り上げました。全国的に見ると、「新規就農者」の総数は減少傾向にあります。一方で、49歳以下に目を向けると、「新規自営農業就農者」は減少傾向にあるものの、農業以外の分野から農業へ挑戦する「新規参入者」は年間2,600人前後と一定数が確保されており、農業分野に新たな可能性を求める姿勢がうかがえます。

福島県においても、新規就農者数は増加傾向にあります。その背景には、就農準備資金や経営開始資金といった支援制度の積極的な活用、自治体独自の支援による後押し、さらに地域に根ざした活動を行う「地域おこし協力隊」の存在など、多様な取り組みがありました。

取材を振り返り、日本の農業を今後も持続的に発展させるためには、第三者継承も含めた人材育成が欠かせないことを改めて実感しました。農業には大きなやりがいがある一方で、技術習得や経営確立など乗り越えるべき課題も多く存在します。それには、その両面をしっかりと伴走支援できる体制が重要であり、国の役割として、新たな担い手を継続的に支えていくことが求められていると強く感じました。